４．　公開講座の実施及びコンソーシアム機関と協働した取組について

（１）「課題研究α」公開講座の実施

前年度までと同様に、地域の課題解決に取り組んでおられる外部講師による公開講座を行った。アドバンストコース以外の生徒にも案内をして参加者を募り、１・２年生数名が参加した。以下に主な講座の内容を示す。

○京都大学学びコーディネーターによるオンライン授業

１０月１９日（月）京都大学が高大接続・高大連携活動の一環として、全国的に展開している学びコーディネーター事業を利用して、オンライン授業を開催した。
参加したのは、第２学年アドバンストコースの生徒（「課題研究α」選択者１９名）及び１、２年生の希望者である。人間・環境学研究科のお二人からお話を頂いた。生徒たちは、「課題研究」の研究対象について掘り下げていくための新たな「気づき」を得たようである。

藏田典子先生からは、「地域の魅力を発見しよう」と題して、地域研究の魅力についてお話頂いた。地図記号を用いて新旧の地図を比べることで、地域の「今」と「昔」が見えてくることや、時代に合わせて地図記号が削除されたり、追加されたりしていること等、地図・地図記号の見方が変わるきっかけを与えて頂いた。特に「比較」することにおいては、変化した箇所だけでなく、変化していない箇所にも注目することなど、課題研究に取り組む上で、参考になるご助言を頂いた。

真鍋公希先生からは「キャラから考える私と社会」と題して、「社会」や「キャラ」といった言葉の定義を明らかにしながら、お話頂いた。各自、自分の「キャラ」とは何かを考えながら、聞いているようであった。中でも「私たちはキャラに縛られている」というお話の中で、「キャラ」は「役割」であり、それによって行動が制限される一方で、役割があるからこそ達成感を得たり、周囲の人の新たな一面を知ることができるといったプラスの面、マイナスの面それぞれがあることを学んだ。「両義性を深く考える」という言葉が、心に残ったようである。

○「地元奈良と自分自身を表現するワイン造り」

（KITANI WINE 代表　木谷一登氏）

令和２年１０月２２日（木）、KITANI WINE 代表の木谷一登氏を講師にお招きして、課題研究α公開講座を実施した。第２学年アドバンストコースの生徒（「課題研究α」選択者１９名）及び１、２年生の希望者２名が参加した。

木谷氏は、本校の卒業生でもあり、ブドウ栽培・ワイン醸造を一生かけて極めたい、奈良の地の味を表現するワインをつくりたい、という想いから、地元奈良県初のワイナリー設立を目指されている。２０１９年には、「ビジコン NARA　2019」で最高の「知事賞」を受賞されている。奈良県初のワイナリーを設立することが６次産業化につながること、アート・クラフト・サイエンスなどの切り口からとらえたワインの魅力などについてお話をしていただき、講演後には生徒からの質問にも丁寧に対応していただいた。生徒は、「ブドウを加工していく中で生じる大量のブドウの皮はどうするのか（廃棄されるのか）」、「ワインを直接消費者に届けるソムリエのような仕事はしないのか」というような質問を積極的に行い、木谷氏の取り組みに関する理解を深めていた。

生徒の感想には、「木谷先生のように、私も『これしかない』と思えるものを見つけていきたい」、「なぜ勉強するのか、という話が印象に残った」というものも多く見られた。ぶどうの栽培やワイン造りの苦労ややりがいについて学んだだけではなく、今後の課題研究や学校生活につながる気づきも得たようである。

○「橿原市の観光・防災・福祉について」

（橿原市観光政策課　川北真也氏、危機管理課　和泉英樹氏、加井大補氏）

令和２年１１月２６日（木）、橿原市観光政策課の川北真也氏、危機管理課より和泉英樹氏、加井大補氏を講師にお招きして、課題研究α公開講座を実施した。第２学年アドバンストコースの生徒（「課題研究α」選択者１９名）及び１、２年生の希望者２名が参加した。

川北先生には、「橿原市の観光・防災・福祉について」というテーマで、ワークショップや講演をしていただいた。

前半のワークショップでは、生徒は防災カードを用いた災害想定ゲームに取り組んだ。「ペットを飼っている場合」や「水害の場合」など、具体的に示された状況において自分や家族がどのように行動するか、グループに分かれて意見を出し合っていた。

後半は、アドバンストコースの生徒が事前に提出した質問に答える形式で、コロナ禍における観光業の促進や、在日外国人が抱える問題への対処、広報制作などの幅広いテーマについて講演

をしていただいた。テーマによっては、観光政策課以外の課や施設と連携して回答していただいたものもあった。

生徒の感想には、「防災を自分事として考えることができた」、「国際交流員の仕事内容について初めて知り、興味をもった」、「情報を発信するときには、さまざまな立場の受け取り手がいることを意識することが大切だと分かった」というものが多くみられ。市役所が地域の暮らしをどのように支えているか、新たな発見がたくさんあったようである。

公開講座の取り組みの今年度の課題は、アドバンストコースの生徒以外の参加者が少なかったことである。公開講座は、生徒が公開講座に参加することを通して、地域の課題を発見・理解したり、課題研究を深化させたりすることを期待して実施している。より多くの生徒がこうした学びの機会を生かせるように、対策が必要である。具体的には、公開講座の周知・広報のタイミングや方法を工夫したり（HR での発信だけでなく、Google classroom や掲示スペースを活用するなど)、公開講座のスケジュールを年度や学期の初めに発表したり、生徒が参加の計画を立てやすくするなどの手立てを考えていく必要がある。